

佐々木 恵美子(ささき えみこ)先生のプロフィール

1984年 埼玉医科大学卒業
同皮膚科学教室入局
1994年 埼玉県本庄市にて恵南クリニック開業

専門科目:皮膚科



◆先生が初めて漢方と出会われたのはいつ頃ですか

開業直後、メーカーのMRさんに誘われるまま、漢方の講演会(講師:大野修嗣先生)を聴講。

その後、埼玉医大東洋医学外来の聴講生として、大野修嗣先生、浅岡俊之先生に師事。
大友一夫先生、角田朋司先生、田端隆一郎先生のご指導も賜っております。

◆先生の御専門で漢方はどのような効果を発揮していますか

専門は皮膚科です。

特に、慢性難治性の「アトピー性皮膚炎」や「痊瘡」に対しての漢方処方、西洋薬の併用を含めると、9割以上です。

◆普段の治療で漢方薬と西洋薬との割合はどれくらいですか

慢性疾患では、西洋薬併用を含む漢方処方の割合が、7割程度。急性疾患は、3割程度です。

漢方薬単独処方、むしろ皮膚科以外の疾患(冷え性、更年期障害、神経症など)が多く、1割程度。この方々は、煎じ薬を希望されることが多いです。

◆10年後の漢方医療はどうなっている(またはどうあってほしい)とお考えですか

当然、10年といわず、100年、1000年先迄漢方医学という医療システムは残さなければなりません。ただし、東洋医学教育の影響などで漢方薬の使われ方もさらに多様化してくると思われま

す。それはそれで必要なことなのかと思いますが、日本漢方の基本となる「医師と患者様との空気感覚」についてはきちんと伝えていってほしいと思います。

優れた医療文化である漢方医学を世界に発信すると共に、基本的なもっとも大事な部分については、きちんと温存する必要があります。

◆先生ご自身漢方を飲んで効果を実感なされたことがありますか

より多くの医師が、漢方に対する基本的な正しい知識を持ち、少なくとも自身の専門分野に関する治療に対しては漢方薬も西洋薬も同じ土俵に上げ、選択できるようになるといいですね。

◆これから漢方医を志す方に一言お願いします

学生時代より、頑固な便秘症。腹痛と下痢を覚悟の上、週末に多量の下剤を服用。この悪循環を「通導散」が解消してくれました。

以来、年齢や体調とともに、処方に変化していますが、基本的に漢方薬は欠かせません。現在は「小建中湯」を基本に、寒くなると「大建中湯」や「附子硬米湯」などをよく服用します。

◆漢方に関心のある一般の方に一言お願いします

良き師に巡り合えること、何よりかと考えます。

様々な著書を幅広く読むこと、セミナーや研究会などへ積極的に参加することは、良き師に巡り合う絶好の機会となるでしょう。



◆その他、ご意見ご感想などを教えてください

近年、年に1度ほど、生薬を求めて中国の奥地を訪ねるようになりました。生薬の「自然にあるがままの姿」を目の当たりにすることは、「生薬の持つ症」そのものの教示となります。

例えば、砂漠に咲く「甘草」。そのしなやかで柔らかい花や葉からは、一見想像もつかぬほどの太くて長い根。僅かな水を求め、そして逃がすまいと、縦に横にと何処までも伸びています。

同じく砂漠の「麻黄」。乾燥しきった不毛の地にただそれのみ、小さな塊となって点在する。まるで地中にこもった熱気を噴き出すための、大地の汗腺そのものに見えます。

更に、標高3千m級の山岳地帯に自生する「大黄」。くるぶし丈以上の植物が育つはずのない高地で唯一、人の背丈以上の太い茎を、天に向かって真直ぐに伸ばす。真紅の花をつけた炎のようないでたちは、まさに「將軍」の名にふさわしい勇壮な姿でありました。

「病のあるところ、必ずこれに対する薬あり」

これは明治の医師、竹中成憲先生が唱えた「土地有薬論」。中国伝来の薬草ばかりではなく、自国に薬用植物の存在を認め日本人がつくりあげた「漢方」という独自の文明を見直し、勉強していきたいと考えています。

注意:先生へのインタビューは、経歴以外、当会が2007年10月に行った内容です。